

## 宮澤賢治の文語詩を読む

横濱市ユートピア青葉「文語の魅力教室」作品

平成二十五年四〜九月

相澤 京子

創造力を働かせ その背景の事柄や 季節や土地や人物に

思ひを馳する文語集 濃縮せられし言葉より 一つ一つを紐解きて

過去の世界に引込まれる 宮澤賢治勉強會

五十棲 和子

四月より宮澤賢治の文語詩を読み始めけり。よろづの人出で來。檢事、堂守、庶務課長、保線工手、校長、學童、明治女塾の舍生など。ことさら面白く思ひしは、昔神童として今は博徒なるの詩なり。又農業技術者として自然觀察は大切にありしことをも思ふ。詩の中に天候の描寫もあまた出で來。

飯島 裕子

宮澤賢治の 文語詩を はじめて讀みて おどろけり 洞察力の するどさや

空想力の すばらしき 日々生活に ねをおろし 自然を愛し 花を愛で

動物達に かたりかく 賢治の世界に ひとりけり

宮澤賢治の 文語詩を 讀みたる講師 凜として 温和の顔が ひきしまり

みじろぎもせず 讀みをへり

## 宮澤賢治の文語詩を讀みて

飯田 美和子

文語詩講座第一回『風櫻』に於て「さくらの花のすさまじき」と詠ひたるに衝撃を受く。我若かりし日天を仰ぎて青き空に重なりたる薄桃色の美しき櫻花を目にし感嘆す。それより花の命短く優雅にして氣品高き花とぞ思ひける。時にしてその姿妖しとも聞き及ぶ。されど賢治、四五分咲きのころ櫻花の風雨に耐へし生命力を「すさまじき」と表はす。なべて大きな木その根深く廣く地に張りて年毎に束の間美しき花咲かするはその力大なる故にあらむ。その表現肯ふべしと思ひたり。

## 妖しき魅力

埋橋 勢津子

四月より宮澤賢治の「文語詩」を學びぬ。吾はじめて目にするものばかりなり。賢治は農民生活に於て独自の人生觀を培へり。なほ加ふるに宗教的情熱に滿つる作品多し。妖しき魅力の虜となれり。『流水』を讀みて、人の世なるは果てしなく雪積む丘を登り、流水の犇く川を渡るが如し。然れど、きみと共にあらむこと望めり。その後にくらかなる春とならむ。

## 賢治の文語詩を知りて

海野 祐子

この教室にて宮澤賢治の文語詩を始めて知りぬ。一行一行讀みし時、背筋の伸ぶる様を感じるなり。いづくの詩をも東北盛岡の嫺やかなる山竝みと厳しき天候を想ひ起せるばかりなり。毎回の市川先生の朗々と響く御聲に我はからずも聞き惚れてをり。

大片 昌司

遠野にて 朝焼けけむる 水かをり 昨夜の酒の残り香と 湯けむりかをる 寝ぼけ顔  
仕事に追はれ 時を過ぎ、いつか過ぎぬる 幾年の あはれさびしと 宿住まひ

川島 欣也

季語といふものあり。これを纏めしものを歳時記といふ。この中に、季節(をりふし)に合はぬもの多々あり。たとふれば、「七夕」、「朝顔」、「八十八夜」などこれなり。ちかごろ、「七夕」を「七夕」を「夏」の季語となす歳時記あり、とも聞く。「朝顔」を「朝顔市」となせば、これ「夏」の季語となす。これいかん。季節(をりふし)にそぐはぬ季語どれほどにかあらむ。これ、ふるき曆のなせるゆゑなるや。傳統文化は守り、守らるべきもの、なれど、新たなる曆の世なれば、氣候(をりふし)のかはりやうに合はする道ありてしかるべし。最後に一句。

朝顔やねぢり鉢巻明けに解く(欣也)。

## 宮澤賢治の文語詩を讀みて

木下 忠美

此度宮澤賢治の文語詩を讀みて感銘を受けしこと少からず。彼こそ地水火風の創造力の達人にありけれと聞きしこと今理解するに至れり。物語は就中風に運ばれて來れり。それは「北の又三郎」を待たずとも文語詩になべて鏤めをるものなり。これぞ賢治の詩の眞骨頂と言ふべきか。

## 受講所感

玉木 光三

文語の魅力を學ばむとて、ユートピア青葉に通ひはじめてよりすでに三月餘を経たり。期待通りの成果を上げ得たるや、多少の疑問なかるべからず。習得の目途明らかならず、今や殘餘の講義全出席を全うするを期するのみ。

## 宮澤賢治の文語詩を讀みて

道明 明美

われこのたび始めて文語詩なるものを讀めり。文語詩は音の響き心地よくいとおもしろく思へり。わけても『流水』が心ひかるゝなり。雪原を走る汽車の窗よりのひろびろなる眺め、凍てつく寒さが身に沁みて思はるゝなり。

## 『曉』

前田 玲子

今年初のほととぎすの啼き聲を聞きし直後故、「ほととぎす」の言葉に親しみを感じたり。っさきは高原にての澄みのぼるさはやかなる初夏の情景を思ひ浮べしが、「小鳥」は出荷用商品なるらしとて驚きぬ。めじろ、うぐひす、すずめ、つぐみめじろ、うぐひす、すずめ、つぐみの類なるか。吾は封介の仕事、小鳥達を待つ人々の生活へも心を移しぬ。

## 『初七日』

森 宏

宮澤賢治の文語詩を始めて知れり。七五調、五七調にて字の過不足なく、賢治の嚴格なる人柄を偲べり。採り上げられし中に一番好きになりたるは「初七日」なりき。

初句には御菓子の子の供へ物を持ち來、二句は反語の「得なむや」とし、三句は骨箱に眼を向け、四句の結びに「兒らは呼び交ふ」とせり。詩情がとくと傳はり來。

## 孟蘭盆會

渡邊 京子

迎へ火の 煙りまとひて 僧侶の 疾く入り侍り  
九十八にて 逝きし義母へ 老いし子ら 讀經すらむ  
新盆の 暑さ厳しく ミンハギも ほろほろ散りぬ

# 『曉』

尾形 松壽

暗夜の帷を切つて落とすが如く、杜鵑が聲高に嘯り、やがて東雲に變りぬ。小鳥の群に先驅けて、郭公の鳴き聲が梢を越えて聞えたり。寢坊眼の封介君、不満なる顔を覗かせながら、馬の轡を手に取りて黙々と代掻きに勤しめり。

宮澤賢治の文語詩を讀みて

小原 信也

宮澤賢治の詩の世界はまことに多様にてあり、また多彩なり。就中我が心惹かれしは、「むかし譽れの神童は…いかさまさいをぞとりにける。」の一篇なり。今の世の推理小説を讀むが如き心地して詩篇を構成せる起承轉結の極みを感じたり。